

災害復興まちづくり支援機構記念講演会  
「三宅島は今 ～噴火・全島避難・帰島そして復興～」  
東京都三宅村村長 平野 祐康 氏

日時：2011年11月30日（水） 15：30～16：30

会場：弁護士会館5階502号会議室

**齋藤**（進行：災害復興まちづくり支援機構 事務局員）

皆さん、こんにちは。今日は総会にお集まりいただきましてありがとうございます。総会の前に記念講演ということで、本日はお忙しい中、三宅村の平野村長にお越しいただきました。ご案内のとおり、2000年9月に全島民避難をし、4年5カ月後に帰島ということで、その辺のお話も含めましてお伺いします。今、三宅は復興に向けて日々頑張っていると思います。

はじめに、村長から皆さんにご挨拶および現状等のお話をいただいて、その後皆さんと質疑応答、もしくは当時の写真等を振り返りながら対談していきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。それでは村長、よろしくお願いいたします。

**平野**（東京都三宅村村長）

皆さん、こんにちは。今紹介いただきました三宅村の村長の平野でございます。私が村長に就任して、もう8年という月日が流れようとしております。この間、残念なことに私は災害だけをやってきたような思いもあります。本日はまた、災害復興まちづくり支援機構の第8期定時総会の中でこのような時間をいただいたことを、関係者の皆様含めお礼を申し上げたいと思っております。

まず島民に代わりまして、平成12年（2000年）の噴火災害におきまして、物資両面から3,800人の島民を支えていただいたことに厚くお礼申し上げます。本当にお世話になりました。皆様方のおかげで、今の三宅島があると考えております。

記念の災害史というものを作りました。その1ページ目に、平成12年9月4日9時45分に、当時の長谷川村長が三宅村災害対策本部からのお知らせということで、避難勧告の文章を出しております。「皆様の住み慣れない島外での生活を思うと胸の詰まる思いがいたしますが、私たちも頑張りますので、どうか島民の皆様も慣れない都会で頑張ってください」。これで避難が始まりました。

そして、頁をめくりますと、私が平成17年1月3日に挨拶として、「三宅島に帰ります、しっかりと三宅島を復興しましょう」と、まさしく三宅の10年後と発災当時のが、ここに2コマ載っております。これを、今ここに来ながら見てまいりました。当時を思い出しますと非常に感慨深いものがあります。我々を含めて行政、もちろん議員さん、職員の皆様、それから防災関係者、ここにおります齋藤さんは、当時、東京都三宅支庁の総務課長をしておりましたが、そういう方たちが一生懸命行った結果で、今があるのかなと考えております。

2000年の噴火ですが、6月から火山活動が始まりまして、最終的には9月4日に全島避難が始まったわけでございます。その全島避難を、決定的な瞬間を決めたのは、当時6月26日から毎週週末になりますと火山活動、要するに500メートルの雄山が暴れまして、小噴火をずっと繰り返しておりました。

8月18日17時2分に大変な噴火が起こりました。4,000メートルの噴煙を、雄山から噴き上げてきました。そのときは、今思い起こしますと日中で、まさしく好天気でしたが、その噴火と同時に真夜中という感じです。明かりも一切消えまして、島の中は真っ暗になりました。それと、雷と雨が降ってきました。

行政の職員として島民を守る義務がありますから、その当時何をしたかといったら、何もできない状況でございました。本当に情けない話ですが、頼りにしたのが防災行政無線です。これが島内に満遍なく配置してありまして、火山の島ですから、もちろん一戸一戸には個別受信機というものをすでに配備、設置していました。そこで行政が何をしたかという、「一切家から出ないで我慢してください」と連呼しているのが実情でございました。あそこに行きなさい、ここに避難しなさいということは一切できませんでした。不可能でした。



思い起こしますと、私自身の当時の感触でいきますと、三宅島はこれで終わったなという気分でございます。当然ながら噴火ですから地震もありましたし、大きく4,000メートルも噴き上げたわけですから真っ黒です。これでもう三宅島は終わって、駄目なんだ、島民もすべて終わりだなというような気持ちでおりました。

それが数時間、何十時間後には収まりつつありまして、それからが我々の4年5カ月にわたる長い避難生活になるわけでございます。最終的に、9月2、3、4日に島民を都会に避難させました。最後の9月4日に島民を、島の栈橋から船で出すときには、故郷三宅島の中に島民が誰もいなくなるということでしたから、私どもは非常に悲しい思いをいたしました。

その当時栈橋に、防災関係者としてわれわれは残ったわけです。行政と防災関係の警視庁、それから都におりました三宅支庁の方々を含めて、その人たちと見送りをしました。私ももらい泣きしましたが、うちの若い女性職員が栈橋で見送りしながら泣くわけです。

というのは船の横に、「絶対帰るぞ、身体に気をつけてガンバレ」いう横断幕を青年団の仲間が出していました。その当時、私は財政課長でしたから、このシーンで泣くと同時に、行政の職員として帰さなければいけないという気持ちと半々ございました。私は村職員になって30数年たっておりまして、本当にこのときは胸が詰る思いでございました。

逆にそのとき職員をやっているいいなとは思いつつも、私も被災者でございます。当然ながら職員も被災者ですから、そういうときに住民と違ってわれわれは自由にならないということも痛感して、職員もかなり心を痛めたと感じたと思っております。非常に辛かったです。



その後、我々は残りまして、島の中を守っていくわけです。いろいろな手立てをしながら島の中を守ろうということで、もちろん国、東京都が中心でございますが、ホテルシップとか東京都の知恵をいろいろ借りながら、われわれもその場の中にかかわりまして、島を早く立て直そう、早く帰そうということで頑張ったわけでございます。けれども、当初は復旧がなかなかうまくいかなかったことは覚えております。

というのは残念なことに、火山ガスというものが出ました。三宅の噴火の歴史をずっと見ていっても、火山ガスという言葉は一切出てきません。私もこの年ですから、3回噴火を経験しております。中学3年生のときが昭和37年の夏の8月の噴火で、それが1回目。それから昭和58年の噴火が2回目でございます。そして今度の2000年が3回目ですが、その3回の中で非常に厄介なのが2000年の噴火でございます。ただし噴火災害の被害の規模が大きいのは、58年の噴火です。

先ほど3.11の津波の映像が出ていました。まだ行方不明者が数千人規模にいるということですから、この人たちも今非常に辛い思いをしているわけです。もちろん早く復旧、復興してもらいたいと思います。よく言うのですが、噴火して溶岩が流れていくのを「山津波」という言い方をします。58年当時、山が噴火して溶岩が流れてきて、一瞬でございませぬ。一晩かからなかったです。産業も観光もいちばんにぎやかな大集落をひとなめにし、340戸のすべての財産を、すべての思い出を奪っていきました。大地を埋めていって、その集落を総なめにしていきました。

これがたぶん一番辛い、何も残っていないのです。私も実家が埋まりまして、良かった

のか悪かったのか、学生時代の成績表もないわけでございます。残念なことに、若いころの写真も一切ありません。

そういう意味では、今回の 2000 年の噴火はこのような火山ガスによる被害が出ていますが、島民に聞くとこちらのほうが意外と厄介なのです。もう 10 何年も火山ガスが噴出しているわけですから。

先ほど言ったのは、一瞬、一晩で財産を失いますが、次の日から復旧、復興が出来たわけでございます。今回の場合はこういう状況が非常に続いて、家屋も 4 年 5 カ月のうちにだんだん朽ちていきました。

これは山の状況でございます。残念なことに、先ほど言いました 8 月 18 日の火山ガスの降灰で、山の中腹から上はすべて丸裸になってしまいました。今いちばん懸念しているのは、たぶん三宅では将来、水問題が大きな問題になってくるだろう。今ではないですけれども、将来は水の問題も出てくるのかなと考えております。58 年には、外にあまり出ませんでしたし、避難もしません。翌日はブルドーザーを入れて復旧にあたったわけです。今回は、ちょっと厄介な噴火です。



これが島外避難先の状況でございます。この当時は日本一広い村というような覚えがあります。北は北海道、南は沖縄のほうまで、たぶんすべてにいました。総勢が 3,684 人と出ていますが。こういう状況で避難をいたしました。とくに東京都内では、八王子、江東区、北区にかなり多くの方がいました。島しょ部で見ますと、いちばん多かったのは八丈島でございます。

避難を産業別にいきますと、当時、水産関係はもちろん島の中では船を置けませんから、母港としたのが下田港でございます。それはなぜかというと、北区の保養所が下田にありまして、その保養所をお借りしまして、そこを母港にしました。朝早く船で出かけて、三宅近海でトローリングをして魚を捕って、お礼のために下田港に持ってきて水揚げしました。下田港の漁協も非常に助かるということで、そういうことをしております。

避難を産業別にいきますと、当時、水産関係はもちろん島の中では船を置けませんから、母港としたのが下田港でございます。それはなぜかというと、北区の保養所が下田にありまして、その保養所をお借りしまして、そこを母港にしました。朝早く船で出かけて、三宅近海でトローリングをして魚を捕って、お礼のために下田港に持ってきて水揚げしました。下田港の漁協も非常に助かるということで、そういうことをしております。

残念なことに、農業はまったくできない。ハウスも土地も東京に持ってこられませんし、そういう苦勞の種が農業関係にはあったと思います。

<参考>平成13年8月1日現在

都道府県別人数	
北海道	1
宮城県	1
秋田県	3
福島県	4
茨城県	5
栃木県	7
群馬県	15
埼玉県	112
千葉県	54
東京都	3,295
神奈川県	132
山梨県	6
長野県	4
静岡県	34
愛知県	0
大阪府	0
岡山県	5
山口県	1
愛媛県	1
熊本県	0
沖縄県	4
合計	3,684

内訳別紙

住宅種別人数		
公営住宅	都営	1,614
	都民	283
	公社	265
	公団	198
	市区町村	176
	他県営	3
社宅		279
施設等		93
縁故		773
合計		3,684

避難者数	3,704	100%
避難先確認者数	3,684	99.46%
未確認者数	20	0.54%

避難世帯数	1,901	100%
避難先確認世帯数	1,884	99.11%
未確認世帯数	17	0.89%

ここにいろいろな写真が載っておりますが、「三宅島げんき農場」。農業では八王子のほ  
うの所有地をお借りしまして、当時の国の緊急雇用対策の資金を使いまして、「げんき農場」  
を作りました。コミュニケーションを深めなが  
ら、心のよりどころを求めながら、将来、三宅  
島に帰るために種の保存をしました。三宅島の  
特産品は、農業ですと明日葉とか赤芽イモとか  
いろいろあるわけですが、ここで将来帰る夢を  
つなぐために種の保存をして、必ずそれを持っ  
て帰って島で復興するのだというような意識を  
植えるのも、1つの目的だったのかなと考えて



おりました。国はもちろん、東京都にはこのときにも大変お世話になっています。

農業関係でいいますと、この次に江東区の夢の島で「ゆめ農園」もやらせていただきました。これは花を作る農園でございます。島民が花を作って、お世話になった各区のイベントに、お礼も感謝も含めてその花を届けるというものです。山から出た溶岩をくり抜いて、そこに花を植える、「溶岩の寄せ植え」といいますが、それをお世話になっている皆さんのところに、お返しのプレゼントをしたということも行っております。

写真にあります第6回三宅島島民ふれあい集会。これも故郷を忘れさせないための1つの方法でございます。これは第6回ですが、当初は年2回ずつやっております、最終的に4年5カ月で9回ということ。港区の小学校をお借りしまして、はとバスを早朝から配備し、各団地からここに集まっていただくという方法でございます。

三宅島には、特に地区別にいろいろ呼び名が、旧字名があります。例えば阿古ですと、ウワバラ、シタバラ、ミヤケユウケとか、A、B、Cとか地区を呼ぶわけ。そこに集まった島民をコミュニケーションのために地区別に、例えば阿古地区は、シタバラはこの列ですよ、ウワバラはこの列です、伊ヶ谷はここですよ、神着はここですよ、伊豆はここですよ。そうやることによって避難生活の苦労話ができますし、帰ったときにこうしよう、ああしようという話ができる。



年2回の楽しみは、本当に涙を流しながらの5時間ぐらいのコミュニケーションの場ということで、当然ながら三宅島の女性の力で、もともとの島の料理を作って提供するとか、島にある伝統の芸能をここで披露する。これは三宅島の神着に伝わる木遣太鼓ですが、こういうものをいつまでも故郷を忘れさせないためにやったことはあります。

これも大ヒットだと私は思っております。9回で終わりましたが、私は9回目のときに村長になっておりましたので、最後のステージで、必ずやお世話になった、支えられた皆様方を三宅島に一度招待して恩返ししますと。2年前に始めて多くの方を島に呼んで、復興の状況、皆様方のおかげでここまで来ましたというようなお礼と感謝の集いをやりました。各団地から来ていただいて、非常に盛り上がった記憶もあります。

それから帰島ということ。平成16年7月20日、三宅村村長より「平成17年2月を目途に避難指示を解除したい旨」を都知事に伝えました。村長になって、島のライフラ

インもだんだん整備されてきました。噴火したときには、我々は春先には、桜の咲くころにはもう帰れるから心配しなくていいよと言っていたのですが、だんだん長期戦になりますと島民の方が、いつ帰れるかと言ってきます。まさしく今、東北で起こっております、原子力発電機事故の被害とまったく同じ状況が出てきました。

我々行政として期間が言えない。いつ帰ると言うことが島民に指示できない状況の中で生活していたわけです。それでいよいよ準備に入っていくわけでございます。

このとき島に帰りますよと言い、島民に住民説明会を細かく満遍なくやったわけです。

これが平成 17 年 2 月 1 日、いよいよ帰るときでございます。ここに座っております石原知事から、第一陣の出発ですから激励の挨拶をいただいているわけです。ここにおります関係者すべて大変お世話になった人で、中には友好町村の方もおられます。



船が竹芝桟橋を出ました。私も当然ながら乗ったわけでございますが、残念なことに、ああ、この先また苦勞が多いなと。みんなが船に乗って、三宅に船が着かないのです。海上模様が悪くて、桟橋に着けられない。三宅からさらに 80 キロも離れた隣の八丈島まで、我々を乗せて行ってしまいました。それでまた帰り着くかなと思ったら、まだ桟橋に着けられなくて、東京竹芝桟橋にまた戻ってきた。

ですから、往復故郷の三宅を横目で見ながら船に揺られて戻ってきて、職員とみんなと一緒に、またその夜 10 時半の船に乗りまして、ようやく 2 日目の朝、2 日間かかって三宅島に着いた。これは前途多難だな、まだ三宅島に帰ってくるのは早いのではないかと神様がいたずらしているのかなというようなことを、職員と話しておりました。この写真を見ますと非常に懐かしい写真でございます。三宅島も今はおかげさまで復旧から復興で、これからいよいよ地域振興ということに入っていくのかなと思っております。

(編者注) 平成 17 年 2 月 1 日に東京竹芝を出発した島民の帰島第一陣は、翌朝 5 時に三宅島へ到着した。先乗りとして 1 月 17 日に三宅島を出発した村職員を乗せた船は、三宅島に着岸できず、翌日の 1 月 18 日に再び乗船した。

三宅村の将来を決める 10 年計画を作るわけですが、今は第 4 次の総合計画を作っております。第 4 次の 10 年計画は、残念なことに東京で作りました。三宅島に足をつけて作った総合計画の 10 年計画ではないのです。空想の中です。ですから策定委員の先生方も、

国やいろいろな機関の方から知恵を拝借して作った計画でございます。復興計画ももちろん作りましたが、残念なことにもうまくいっていない状況でございます。いよいよ来年の平成 24 年から 10 年の、前期 5 年、後期 5 年の三宅島の将来を決める復興計画を、今、策定しているところでございます。

三宅島に足をつけてしっかり、農業はこうだ、水産はこうだ、子どもたちをこうするんだ、教育はこうだ、福祉はこうだというような状況で、今計画を策定しているわけですが、当然ながらこれから作る計画につきましては、振興を軸に作っていきたい。もちろん災害復旧は今年で終わります。来年からはいよいよ地域の振興、地域の力ということをテーマにして、今策定作業を急いでいるところでございます。ここにあります三宅島の宝をしっかり盛り込んだ、いい計画を作っていきたいと思っております。まだまだお世話になった全国の皆様方にお礼も満足に言えていない状況でございますが、これからは、しっかりとやっていきたいと思っております。

1 つだけ、空から三宅島にまた大きな天罰が下りてきています。先ほど言いましたように総合計画の 10 年計画を作るわけですが、その中にアクセスの問題で、また難題が出てきました。今、三宅島と羽田を結ぶ飛行機が 1 日 1 便、10 万人の署名活動を全国からとって、火山ガスが出ていても飛行機を飛ばしてくださいと一生懸命事業主に言ったのがようやくかなって、3 年経つのです。そうしたら、その飛行機が平成 25 年 3 月に退役というような難題が落ちてきました。

私もこの 7 月に事業主の全日空から唐突に言われまして、困ったなど。今、東京都にもお願いし、東京都も全力でバックアップしてくれている。当然、この件についてはしっかりと、何が何でも足の確保、空の確保をしなければいけない。先ほどのように、飛行機がない限り絶対、地域の力を付けられない。

過去の例でいきますと、観光客 8 万人の半分は飛行機で運んでいたわけです。今はその半分は船だけを頼りにしておりますから、是が非でも空のアクセスを確保しない限り、三宅島の振興はありえないのではないかと考えております。私も残されたのはあと数カ月の任期ですが、しっかりとその間にこのように大きな難題について、見通しをつけていきたいと考えております。以上でございます。どうもありがとうございました。(拍手)

**齋藤** ありがとうございます。残された時間はあと 25 分ぐらいですが、先に皆さんからいろいろご質問をいただいて、お答えさせていただこうと思っております。質問ある方、どうぞ。マイクを使ってください。

**質問** 貴重な講演をいただきましてありがとうございます。4年以上にわたって避難をして、いちばんの問題はコミュニティの確保をどうするかだと思うのですが、住民の皆さんの動きと東京都の動き、それから村の動き。そのへんはどういう実態だったのでしょうか。

今の3.11で避難している動きにも関係してくるだろうと思いますが、よりどこを何にするかというのと、一度住みだすとその生活のパターンで目の前の生活を一生懸命やることになりますから、そうするとそこでずっと落ち着いていくというところがありますね。島の場合は気持ちが違うのかなという感じもするのですが、そのへんも含めて何かご意見というか、お話いただければと思います。

**齋藤** まず行政は、当時私も三宅支庁の総務課長をやってまして3年間担当していたのですが、いちばん苦労したのは村の関係者の人たち、関係機関の方々とどうコミュニケーションを取るかということでした。帰島前に帰島に向けたいろいろな準備作業をするということで、村長をはじめ村の関係機関の方々にお集まりいただいて、定期的にいろいろな情報を発して情報を共有化しました。

私が担当したのは3年間ですが、都庁の中に村の臨時役場を作りまして、そのそばに三宅支庁があって、同じフロアでいろいろな話ができたといいようなことだと思います。村長、そのへんの具体例を2つ、3つお話ししていただいただけませんか

**平野** コミュニティを維持するために、避難後いちばん力を入れてやったのが、「島民連絡帳」というものを作りました。

**齋藤** 電話帳ですね。

**平野** ええ。今は個人情報に厳しい時代ですが、当時は、先ほど言ったように日本全国に散らばったわけですが、そこを社会福祉協議会の協力を得ながら、避難先の連絡帳を作りました。電話帳ですね。

それによって例えばお年寄り同士が、今は何をやっていよう、元気だったとか、今は北区にいるけれども買い物はうまくできるかとか、都庁に一度行ったことがあるかとか、そういうコミュニティができて、情報の提供がスムーズにいったのかなと。これがまず1点ですね。

あと、各団地に分散しておりましたので、その団地の代表者をお願いして、そこにファクス等を設置して風穴を開けたのが、行政と団地の責任者。例えば北区の桐ヶ丘のA団地、B団地、C団地にいたわけですが、その人たちの代表者を決めて、そこでの確かな情報を

行政が流す。またその団地の人たちが行政にどういう要望をしたいか、お願い事があればそこからもらうということで、そういう情報交換したということもあります。

**齋藤** 当時避難中であっても三宅島の誰々さんというと、その帰島先のところまで郵便がいく。こういうシステムで、郵便は早くから協力してもらえました。

はい、ほかの質問。どうぞ。

**質問** 先ほどこれからの 10 年の計画をこれから立てられるということでしたので、ちょっとお聞きします。それと、さっきアクセスの問題についてもおっしゃいましたが、三宅島の観光資源とか。あるいは地域の力というのですか。今写っているものには「自然の宝庫、三宅島へ行こう」と出ているのですが、簡単にいいますと、三宅島の本当に訴えたい魅力は何なのか。伊豆七島にはいろいろな島があるのですが、それと比較したときに三宅島の強みとは、どういうふうにお考えになっているのか。

今ここに「自然の宝庫」と書いてあるのですが、要するに自然の宝庫で余分なものは何もない、それを売りにするんだということも含めて、そのへんの観光については 10 年の間にどういうことをお考えになっているのか、ちょっとお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

**質問** 関連して、復興計画、地域振興をするとおっしゃりましたが、10 年のいちばんの目玉の政策は何をお考えなのですか。観光なのですか、それとも水産業、農業とかあると思うのですが、それもあわせてお聞きしたいと思います。

**平野** 実は私、もともと帰島宣言したときに、島は観光を軸に生きなければいけないと、島民にもお話をしております。よく言うのですが、コーヒーを飲むのと同じです。コーヒーの中身が観光であって、砂糖は農業であったり、ミルクが漁業であったり。それがうまく複合して、島の活力が出てくるかなと認識しております。当然ながら、総合計画には観光を軸にしたものを盛り込んでいきたいと思っております。

それから観光の関係でご質問が出ましたが、まず離島は、すべて観光が一緒なんです。例えば釣りもできます。ダイビングも場所によってはできます。ただ残念なことに、ほかの島にないものでわれわれが都会の人たちに観光として与えていきたいのは、やはり自然といいですか、火山が軸になっていくのかなと思っております。

火山ガスが止まれば、われわれとしては観光のチャンスだと思っております。火口も一度皆様方にも見ていただきたいのですが、そういうもの、ほかの島にないものを持ってくる。もちろんほかの島にも自然はありますが、火山、湖、鳥、このへんが観光の軸になっ

ていくのかなと考えています。

**齋藤** 残念ながら、今でもまだ火山ガスがちょっと出ていまして、山の上のほうは立ち入り禁止ですね。山の中腹に林道があるのですが、そこから上はまだ行けない。現実問題そこはもう禿山で、まだ緑もぜんぜんない。そういう状況ですので、自然がある程度つくまでは相当の年数を覚悟して。

**平野** 何百年ですね。

**齋藤** そうですね。緑がつくには、少なくとも 100 年以上の単位だと思いますよ。そう思っています。はい、ほかの質問。どうぞ。

**質問** 先ほど触れられましたが、今、水はどうなっているのですか。

**平野** 明日、簡易水道の全国大会があり、役員なので今日も午前中会議をしてきたのですが、水は地下水を使っています。島内に湖がありまして、山から流れてくるのを湖に入れないで、そこに井戸があり、そこから覆水を汲んでいます。

**質問** 飲めるような水がとれるということですか。

**平野** そうです。それを回しています。

**齋藤** はい、どうぞ。後ろの方。

**質問** 今日は非常に興味深いお話をありがとうございます。手元にある資料集を拝見しております。4 ページを見ておりますと、平成 12 年に 3,846 名の村民の方がいらっしゃった。22 年 1 月 1 日現在で 2,815 人、村民の方がいらっしゃる。

災害のときはそうですが、復旧した、復興したのはいいけれど、結局人間が戻らなければ本当の復興にはならないという話もよくあります。三宅島も、そういったことで当然まだ火山ガスが存続中であることが、非常に障害になっているのだらうと思います。

ちょっと失礼な言い方かもしれませんが、いわゆる経済合理性ということから考えますと、どれほどの国費、税金を復興のために使うのがいいのだらうかという考え方と、そういう地域コミュニティを維持、存続していかないと日本の国は健全な発展はしないのだという考え方と、いろいろあると思うのです。

今までどれぐらいのコストをかけてなさっているのかよく分かりませんが、今後のいわゆる島の復旧、復興の見通しと伺いますか。火山ガスとの兼ね合いがあると思いますが、人口は増えていく方向にあるのでしょうか。見通しはいかがなのでしょう。

**平野** 人口の関係で質問が出ましたが、昭和初期には、最高で 7,000 人ぐらい人口がありました。残念なことに何回も噴火があり、噴火ごとにそれを機に何 1,000 人単位で減っ

ていくのです。今回も 1,000 人減っていますが、その前の 58 年、37 年、昭和 15 年と、そのたびに人口が減ってきているのは事実でございます。

なぜかという、若い人たちが、個人投資がしづらいということが原因になっているのかなと思います。われわれ行政の職員としては、もちろん責任者としては、夢を作っていく仕事ですから、総合計画についても当然ながら大きな投資は望まなくても、島民が夢を持っていくような計画は作らなければいけないという使命がございます。当然これからも地域力というキーワードで、財源は国あるいは東京都にお願いしながら、地域振興を図ってまいりたいと考えております。

**齋藤** ほかの質問。はい、どうぞ。

**質問** 私は今福島で、警戒区域のところの行政ビジョンのお手伝いなどをしています。実際向こうの支援活動をしていて、行政からするとなかなかいつ帰れるか分からないという焦り、町民のほうは半ば諦めといいますか、家に帰れないんだというような思いも持っています。

実際、三宅は長い時間ずっとこうやって東京に避難したりして、帰還が見えない中で苦勞したということで、今福島のほうで焦りとかのある行政ないしは町民に対して、何か一言、苦勞の中で見えてきたところがありましたら教えていただければと思います。

**平野** 非常に難しい質問でございます。残念なことに、われわれは先ほど言ったようにすぐ帰るということでしたが、長期的に 4 年 5 カ月ということになりました。

私も福島県を中心に、この 7 月からずっと町や村を数カ所回ってきております。その中で首長さんも含めてどういう言葉が出てくるかという、非常に申し訳ないですけども、県に力がないという言い方を、各首長さんが言っております。とくに県を通り越して、自らが国に行ってお願ひしなければいけないという言い方をしています。

逆にそれをひっくり返しますと、今、政府が復興庁を作ろうと言っておりますが、復興庁を作ったときにお願ひといいますか、私としてやっていただきたいのは、個人的な発言かも分かりませんが、直接交付金をやろうとしているじゃないですか。基金なんかやめて、もう交付金一本で行くというような言い方をしていますから、県をスルーして、直接、町や村にお金が入る制度といいますか、交付金の制度を作っていただけるのがいちばんいいのではないかと思います。

**齋藤** ほかに質問、ありますか。ちなみに 4 年 5 カ月の間、国も都も本当にうまく三位一体になって、まず復旧工事をしてきました。それで今は復興に向けてということで、本

当に幅広い施策をやってきました。ガレキの処理ですが、東京まで運んでくるとか、環境省を説得して、災害が起きてから1年間とか、一定の期限があるのですが、それを何回か延長した思い出はあります。

いずれにせよ三宅村は、島民の皆さんがものすごく団結力が強い。それと、みんなが島に帰りたいとの思いが強かった。これをまとめ、平野村長が村長になってから帰ろうということになりました。その前は、ガスが出ているからもうちょっと待てと言ってきたのです。

ほかに質問をどうぞ。せっかくこういう機会はございません。はい、どうぞ。

**質問** 前に青ヶ島の総合計画を作るお手伝いをしたことがあります。それは測量専門家派遣制度というのがあって行ったのですが、2年間やりました。僕も平野村長のおっしゃる観光というのはどこの島も、大島も八丈島も、伊豆七島すべてで非常に目玉になると思います。

青ヶ島でのとき少し驚いたのは、天然塩を造ったり、明日葉に似た天然のシダ植物があって、これを販売するとか。それから漁業も、今まではただ捕って水揚げするだけだったのを、養殖的に籠みたいなもの作って、そこに生簀みたいなの飼う装置ですかね。そういう、もう1つ地元、地場産業というのでしょうか。

今この写真を見ただけでもそうとういい素材がいっぱいあるように思いますので、それを軸にしながら観光というのを。観光というのは水物なので非常に難しいのですが、そういう意味でいうと、三宅島ならではの地場産業というか、そういうものを軸にして、それを逆に観光でも打ち出す。そのほうが大事かなという気が若干したものですから、参考意見です。

**齋藤** 三宅島の観光で最大の問題は、正直、足なんですね。飛行機が飛びました。今年の就航率はどのくらいですか。

**平野** 36です。

**齋藤** 36パーセント。冬場はまずほとんど飛ばないのです。それと、東京竹芝から船で行くのが夜の10時半出発で、着くのが朝の5時です。この朝の5時というのがきついですね。

**平野** 三宅の位置が、観光には中途半端なんです。だけど、逆にそれが売りの1つになるのかなとは思いますが、本当に中途半端です。僕自身のやることも。(笑)

**齋藤** やはり場所の問題で、ちょうど伊豆七島の中で真ん中付近にあるのだけれども、

足の便からいうといちばん中途半端な場所。そういうことですね。

質問をどうぞ。

**質問** 火山と戦っているのに大変不謹慎な言い方かもしれませんが、観光的に中途半端なデメリットとかいろいろありましたけれども、実は私たちも阿蘇とかキラウエアとか、火山を見に行くのですが、20年にいっぺんずつ今のところ来るわけですから、まったく火山抜きの観光というのは、復興自体が逆にいうと考えにくい。

大変な負の遺産、例えば中国の村、開平でしたか、名前が間違っているかもしれませんが、毎年盗賊に襲われるために高樓を1つ高いやぐらにし、その時期が来ると見張りがそこへいて、全員避難するのですね。そこを穴から射撃して守るといような歴史があり、それがユネスコの世界遺産になっています。

いわゆる逆転の発想ですかね。そんなことを火山に苦勞していらっしゃる方に大変失礼で僭越な言い方だとは承知しているのですが、100年、200年の長い目で、火山を1つの観光にするんだということで、当然その裏づけとしては、火山の活動期には東京なりどこかに安定的に避難するところを確保する。そういう方法も1つ考えていかなければいけない宿題といたしますか、あるのではないかという感じがします。

日本中かなりの観光地を回っているのですが、皆さん大変なデメリットが実はメリットだという逆説的な見方を持っています。そういう意味で大変村長さんに失礼な言い方だとは思いますが、火山を見せる。火山には遊歩道もあります。

私たちの仲間も定期的に相談を、弁護士、司法書士その他で行っているのですが、そこも災害復興に付き合うノウハウを大変持っている事務所になっているわけです。逆にいうと、それが今回の福島でもある意味役に立っているところもあるわけですから、そういう点をぜひ私たちもこれから考えていきたいと思っております。

**平野** ありがとうございます。

**質問** 現在の村民が、2,784名ということでデータがあるわけですが、高齢化の問題があるし、若者の問題があると思います。若者はやはりパーセンテージが減っているのですか。

**平野** 噴火して島へ帰りまして、今の高齢者率といいますか、65歳以上が37.4%ですか、それから若者も、地域によっては相当帰ってきている、19歳以下が10.1パーセントです。

**質問** ただ、過去のものとは比べても率は減ってきていますか。

平野 率は減ってきています。

質問 若者の率は減っている。

平野 帰村率が若者は少ないですから減ってきています。ただ、今は若い人たちが来て、赤ちゃんの数は増えています。ただ 37%の高齢者率ですから、そのぶん自然淘汰していく。

質問 それは全国的な問題ですから。

平野 ええ。そうすると、プラスマイナスがなかなか増えてこないというのが実情でございます。

質問 赤ちゃんは増えているということですね。

平野 ええ、そうです。

齋藤 いろいろご質問も多くいただきましたが、村長はその後どうしてもということでございます。今日は本当にお忙しいところ、ありがとうございます。(拍手)

平野 どうもありがとうございました。この後、友好的な付き合いをしております新潟県の山古志村のほうで、新米 16 俵を三宅の子どもたちに食べさせたいということで、贈呈式があります。子どもたちが交流しており、ちょうど山古志の棚田でお米を作っていただきまして、長島元村長も来ていただけるということで、その贈呈式がありますので、これで失礼させていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)